平城宮跡とその周辺の発掘調査

平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部では1973年度には第1表に示した調査をおこなった。宮内の調査のうち第78次南は推定第2次内裏の後宮東北部分にあたり,第81次東,第84次は通称一条通り沿いの民家移転後の整備に伴う調査であり。1961年におこなった第6・7次調査地に隣接する大膳職の一郭である。また第82-1次から第82-7次に至る調査は宮東辺および北辺部での民家の新・改築などの現状変更にともなう小規模な調査である。本年度はまた，平城宮跡周辺の住宅や公共施設の新築などによる事前調査が多く，法華寺旧境内の6件の調査をはじめとして奈良市庁舎移転建設予定地となった三笠中学校跡地の調査（83・86次），奈良県警基地建設予定地の調査（85次）があった。さらに，奈良市の朱雀大路復原計画の一環としての朱雀大路規模確認調査に協力した。

このうち平城宮跡（78次南，81次東）と法華寺旧境内（82—6・9・11次）と京内（83，85，86次，朱雀大路）遺跡についての概要を述べる。

調査次数	調査地区		調査期間	面積	主な検出遺構
78次南	6AAP-L	推定第2次内裏	1973.4.9～7.20	29.1a	築地回廊,建物,井戸
81次東	6ABO-E	大膳職	〃 .4.12～7.19	9.9	築地，門，建物，溝
82－1	6ALE	東院	〃 .4.11～4.13	0.4	溝，柱穴
82－2	6AGB	宮西面一坊大路	〃 .8.17	0.2	瓦溜
82－3	6ALD-C	東院	〃 .11.8～11.12	0.3	柱穴
82－4	6AGA-F	宮西面一坊大路	〃 .12.19～12.22	0.4	溝
82－5	6ALD-D	東院	〃 .12.20	0.1	柱穴
82－7	6AAO-B	推定第2次内裏北方	1974.1.22～1.28	0.5	溝，古墳周濠
84	6ABN-E	大膳職	1973.11.12～12.24	9.3	築地，塀
82－6	6BFK-J	法華寺金堂	1974.1.18～2.1	1.6	建物，溝
82－8	6BFK-Q	法華寺旧境内	〃 .2.4～2.6	0.1	溝
82－9	6BFK-U	〃	〃 .2.4～2.12	0.3	柱穴，鍛冶関係遺物
82－10	6BFK-Q	〃	〃 .2.26～2.27	0.1	土坑
82－11	6BFK-T	〃	〃 .2.28～3.7	0.5	柱穴
83	6AFI-H	三笠中学校	1973.8.1～10.9	35.0	邸宅遺構
85	6AFR-A.B	県警機動隊基地	〃 .12.1～12.14	3.3	建物，井戸
86	6AFI-H.G	三笠中学校	1974.2.12～6.4	30.0	邸宅遺構
	6AIA.6AHD	朱雀大路	〃 .2.15～3.30	9.8	側溝，下ツ道
	6SNR	平城ニュータウン予定地内遺跡（音如谷瓦窯）	1973.10.18～11.16	85.5	灰原

第1表　1973年度発掘調査状況

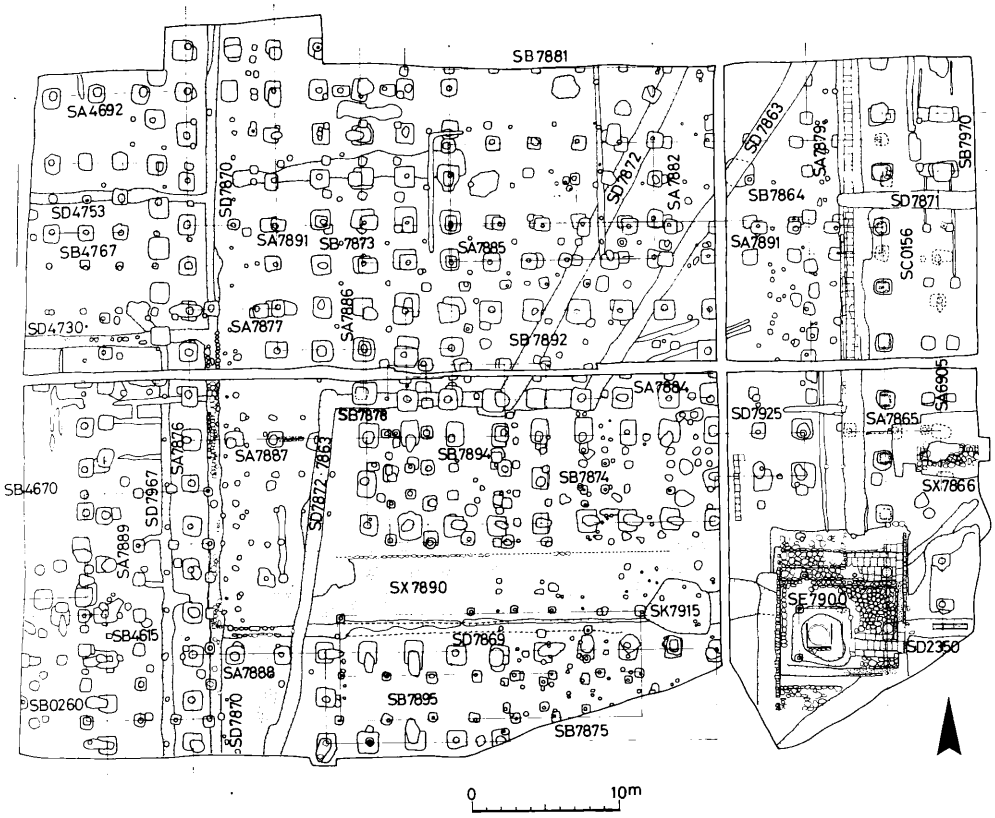
推定第2次内裏後宮地区の調査（第78次南）　推定第2次内裏地区の調査は，昭和29年以来継続的に実施されてきたが，昭和49年度の第78次北地区の発掘終了をまって，その東半部の調査がほぼ完了する。後宮中心部の調査は昭和42年に終了しており（第36次調査），後宮正殿を中心とする遺構群を発見している。今回の調査はそれに隣接する東部で実施し，掘立柱塀16条・建物11棟・溝8条・井戸1基を新たに検出した。これらの遺構は大きく3期に区分できる（第2表）。

Ⅰ期　宮造営当初にあたる。これまでの調査で，中央北寄りに建つ正殿・細殿を囲む東西600尺・南北660尺の掘立柱塀の存在が明らかとなっている。ＳＡ6905は，その東辺を画する掘立柱塀の一部である。発掘区内でⅠ期建物を2棟検出した。ＳＢ7864は南庇をもつ3間×10間の東西棟建物で，東西端よりそれぞれ3間目に間仕切柱を建てる。ＳＢ7895は2間×7間総柱の東西棟建物である。いずれも柱穴の一部をⅡ期の築地回廊基壇あるいは道路の下層より検出した。また，築地回廊の築地直下より玉石・凝灰岩切石よりなる施設ＳＸ7866を検出したが，その性格・用途は不明である。

Ⅱ—1期　Ⅰ期の区画をほぼ踏襲して東西600尺，南北630尺の範囲を築地回廊で囲み，10尺の方眼地割にそって建物を配置する。築地回廊はⅡ期を通して存続する。この時期はさらにａ期とｂ期にわけられる。ａ期は造営当初の遺構である。東面築地回廊ＳＣ0156は11間分を検出した。後述の井戸ＳＥ7900付近では，側柱礎石2個を連続した位置で発見した。柱座の心々距離は3.80ｍで，従来の調査結果から推定される東面築地回廊の桁行寸法3.87ｍよりいくぶん短かい。礎石は厚さ54cmの凝灰岩製で下半は逆截頭方錐形をなし，上面に径70cm，高さ12cmの円形柱座を造り出す。柱座上面には径48cmの赤色を呈する柱当りが残る。また築地回廊に開く門ＳＢ7970を検出した。従来の調査結果を総合すると，東面築地回廊にはそれぞれ11間の間隔で3門が開くことになる。発掘区内東南隅で発見した井戸ＳＥ7900は，築地回廊ＳＣ0156の西半，ほぼ4間分をその一部に組み入れて造られた東西8.3ｍ，南北14.5ｍに及ぶ施設で，築地回廊

時期区分	遺構	柱間数
Ⅰ期	SB 7864 東西棟	10×3
	SB 7895 東西棟	7×2
	SA 6905 南北塀	13間以上
	SA 7865 東西塀	2間以上
	SD 7863 斜行溝	
	SD 7869 東西溝	
	SD 7872 斜行溝	
	SE 7861 井戸	
	SK 7868 土坑	
	SX 7866 石組暗渠？	
	SX 7867 凝灰岩敷石列	
Ⅱ-1a期	SB 0260 南北棟	6×3
	SB 7873 南北棟	7×4
	SB 7874 東西棟	8×2
	SB 7875 東西棟	9×2
	SB 7901 井戸屋形	1×1
	SB 7970 門	
	SC 0156 築地回廊	11間以上
	SA 4692 東西塀	4間以上
	SA 7876 南北塀	16間以上
	SA 7923 南北塀	8間以上
	SA 7924 南北塀	3間以上
	SD 2350 井戸排水暗渠	
	SD 4730 東西溝	
	SD 4753 東西溝	
	SD 7870 南北玉石溝	
	SD 7871 暗渠	
	SD 7872 斜行溝	
	SD 7925 東西石組溝	
	SE 7900 井戸	
Ⅱ-1b期	SB 7878 廊	2×2
	SA 7877 東西塀	3間
	SA 7887 東西塀	4間
	SA 7888 東西塀	3間
	SA 7893 南北塀	7間以上
Ⅱ-2期	SA 7879 南北塀	8間以上
	SA 7882 南北塀	4間以上
	SA 7884 東西塀	7間
	SA 7889 南北塀	10間以上
	SD 7967 南北溝	
	SX 7890 舗道	
Ⅱ-3期	SB 4670 南北棟	5×2
	SB 7881 東西棟	7×
	SB 7892 東西棟	7×2
	SA 7891 東西塀	16間
Ⅲ期	SB 4615 南北棟	5×2
	SB 4767 東西棟	4×3
	SB 7894 南北棟	5×4

第2表　第78次南調査検出主要遺構



第1図　第78次南遺構配置図

と同時期の造営である。東，西辺は凝灰岩切石を積み上げ（現状最高6段），約80°の傾斜をもつ擁壁をつくり，南，北辺には階段状施設をつくる。階段は3段あり，西半は玉石，東半の築地回廊部分は凝灰岩切石を用いる。中央部は南北5.8m，東西7.3mの範囲を玉石で舗装し，この西南寄りに井戸を設ける。井戸本体は径1.65m，高さ1.9mの一本作りの丸井筒で，上部には一辺1.70mの方形枠を組み，1間四方（2.8m×3.3m）の井戸屋形を建てる。玉石敷四周に幅30～40cmの溝をめぐらし，井戸排水は東南の凝灰岩切石溝に集め，築地回廊基壇下を貫ぬく暗渠ＳＤ2350を通して内裏外に流す。井戸からは土師器，須恵器のほか，「白物桶」の墨書ある板，墨書土器の細片数点（判読不能），削りかけ，土馬，櫛，曲物，折敷，あみかご，和同開珎神功開宝，隆平永宝，帯金具が出土した。

ａ期の建物は，発掘区内で4棟検出している。ＳＢ0260は2間×7間の身舎に西庇をもつ南北棟建物で，ＳＢ4660（第36次調査検出）と内裏中軸線をはさみ対称の位置にある。ＳＢ0260の東20尺のところに南北塀ＳＡ7876があり，後宮中心部と東部を分ける。ＳＡ7876の東には，30尺の間を置いて2棟の東西棟建物ＳＢ7875・7874があり，その北に南北棟建物ＳＢ7873がある。ＳＢ7875は2間×9間である。これと柱筋をそろえて，北へ30尺の位置にあるＳＢ7874

は中央に間仕切柱をもつ床張建物で，梁間は2間であるが，東部2間は井戸ＳＥ7900をさけて梁間1間とする。ＳＢ7873は4間×9間で，南6間を総柱とし，北3間には床束を伴なう。

b期には溝ＳＤ7872を埋めた後，2棟の床張建物ＳＢ7873・7874を廊下ＳＢ7878で結び，後宮中心部を区画するＳＡ7876とその東部の建物3棟の間に掘立柱塀を各々1条設けるなどの部分的改修がある。

第2図　78次南調査遺構状況

Ⅱ—2期　遺構は掘立柱塀が主である。ＳＢ7873を廃棄し，ＳＢ7874とＳＢ4775（第36次調査検出）の間をＳＡ7886で結び，これより東にＳＡ7885・7882がＬ字形に延びる。また門ＳＢ7970の前に目隠塀ＳＡ7879を建て，ＳＢ0260北に取りつく南北塀ＳＡ7889を建てる。この時期までＳＢ7874・7875が存続しており，2棟の間にバラス舗装の道路ＳＸ7890を設ける。

Ⅱ—3期　東西棟建物ＳＢ7874を廃棄してこの北側に7間×2間の東西棟建物ＳＢ7892を建てる。また南北塀ＳＡ7876はこの時期まで存続しており，これと東面築地回廊ＳＣ0156を結ぶ東西塀ＳＡ7891を設ける。ＳＡ7876西のＳＢ4670は5間×2間の南北棟建物で，ＳＢ4680（第36次調査検出）と内裏中軸線をはさんで対称の位置にある。

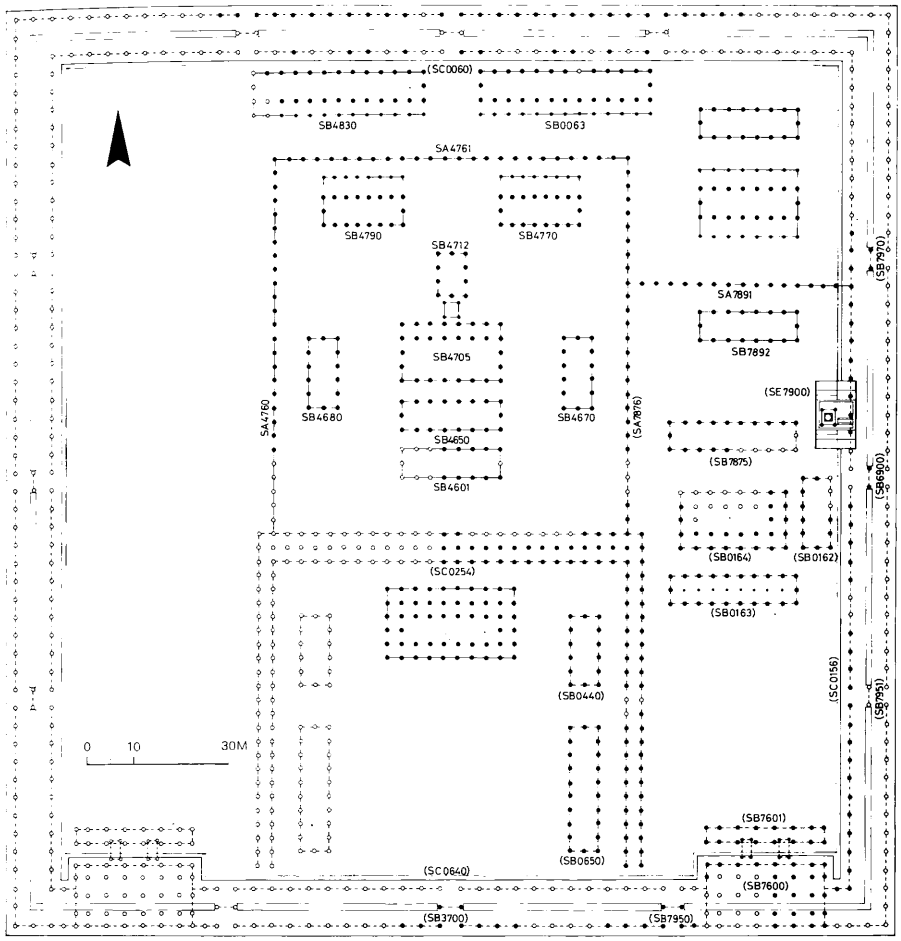
Ⅲ期　全面的な改修が見られ，事実上内裏は廃棄される。発掘区内で検出した第Ⅲ期の建物3棟は，建物配置に関連性が見られない。ＳＢ4767は床束を伴なう3間×2間の身舎の，東・南2方に廂をもつ東西棟建物，ＳＢ4615は5間×2間の身舎の西・北2方に広庇をもつ南北棟建物，ＳＢ7894は5間×2間の身舎の東西に庇をもつ南北棟建物である。

以上3期にわたる奈良時代の遺構の他に平安時代に属する小型建物2棟・掘立柱塀12条などを検出したが，いずれも規模の小さい仮設的なものである。

なお本地区からは軒平瓦290点，軒丸瓦240点が出土している。うち6685Ｂ—6313Ｃ型式，6664Ｄ・Ｆ—6311Ａ・Ｂ型式，6721Ｃ・Ｇ—6282型式の各組合せが認められた。その他の遺物については現在整理中である。

第3図　築地回廊礎石，井戸石敷

Ⅰ期遺構の全体的な性格については，これまで不明な点が多かったが，第73次調査以来次第にⅠ期遺構の検出例が増加し，その性格も明らかになりつつある。今回の調査でＳＢ7864，ＳＢ7895など多数の遺構が認められたほか，築地回廊基壇下



第4図　推定第2次内裏Ⅱ—3期遺構模式図

で厚さ45cmにおよぶⅠ期の整地土を確認しており，かなりの規模の工事が行なわれたことをうかがわせる。また現在進行中の第78次北地区調査でもⅠ期に該当する建物3棟がみつかっているほか，ＳＤ7863が北への延長部で築地回廊造営以前であることもわかった。これらⅠ期の建物が北半に集中しているものの，当区画内には排水施設が整い，充分に内裏としての機能を果しうるものである。平城宮造営当初，元明・元正期の内裏であった可能性は強いと言える。そして，Ⅱ期には築地回廊を伴なう内裏が成立すると同時に，後宮地域が区分される。推定第一次内裏地区では，平城宮が存続する全期間にわたって後宮と見なせる地域が存在しないのに対し，推定第二次内裏地区では常に後宮を備えた内裏としての機能を維持したかにみえる。

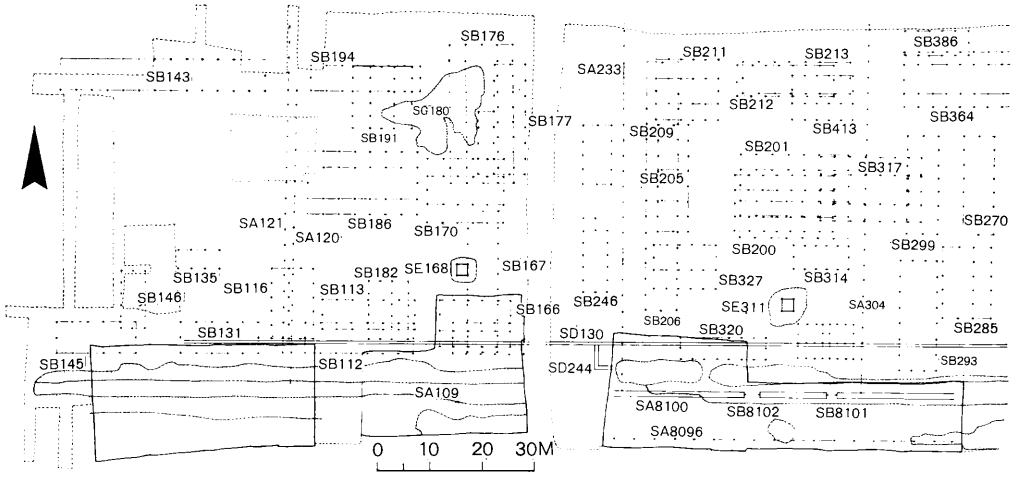
従来，後宮内郭と外郭のありかたが明確でなかったが，内裏内郭を回む掘立柱回廊ＳＣ0247から北に延びるＳＡ7876が，両者を区画するものであることが明らかとなった。また井戸ＳＥ7900は，これまでに発見された官衙地区の井戸には見られない規模と形態を備えており，内裏

の井戸にふさわしいものと言える。平安宮内裏では承香殿と常寧殿の間に「后町井」を置くが，当井戸とは内裏内における位置が異なり，規模についても未詳である。むしろ伝板蓋宮跡で発見された井戸と形態が類似することが注目される。

後宮地区は部分的改修を見ながら奈良時代後半まで継続的に存続する。Ⅱ—2期には多くの塀を建て，後宮地区を細かく区画するが，建物が少なくその性格は明瞭でない。Ⅱ—3期に至り，ＳＡ7876の一部およびＳＡ4760・4761（第36次調査検出）の掘立柱塀によって後宮中心部を凵型に囲み，その内部に建物を対称に配置する。またＳＡ7876東には3棟の東西棟建物を柱筋を揃えて建てるなど（第78次北地区調査），再び整然とした配置が見られる。この時期がむしろ平安宮後宮の建物配置に類似するようである。

大膳職地区の調査（第81次東・西）　大膳職に推定される６ＡＢＯ区の調査はすでに昭和34～38年に終了している。今回の調査は，当時民家が建っていたため未調査となっていた2個所について行なった。

東地区（６ＡＢＯ—Ｅ）　検出した遺構は建物3棟・掘立柱塀3条・築地3条と門2棟・土壙多数などである。周辺部の調査が終了しているため新しく得られた知見は少ないが，今回の調査で初めて大膳職南を画する築地を確認した。ＳＡ8100は幅4尺の東西方向の築地で約20尺の間隔をおいて掘立の寄柱を建て，南北に幅5尺の犬走りを設ける。途中2門ＳＢ8101・8102を開く。前者は当初桁行7尺であったものを後に10尺に拡張しており，それに伴ない門脇の築地も一部造り替えている。ＳＡ8100には掘立柱塀ＳＡ0233が取りつき，当地区の西辺を画している。ＳＡ0233は南端3間で造替が認められる。ＳＡ8078はＳＡ8100を約3尺北に移して建てた東西方向の築地で，西端で北に折れＳＡ8077となる。北側溝は入隅部分で凝灰岩製の暗渠となりＳＡ8077下を西に抜ける。ＳＡ0304はＳＡ8077の東約150尺の位置でＳＡ8078に取り付く南

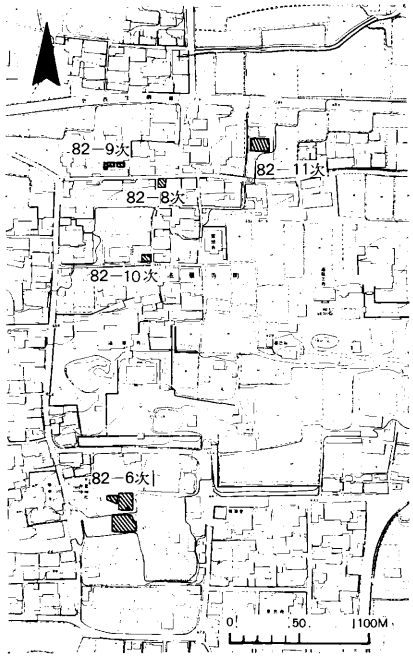


第5図　大膳職遺構配置図

北の掘立柱塀である。ＳＡ8100・8078の南は推定第一次内裏地区との間の空閑地（道路）となっているため顕著な遺構は認められない。その他平城宮遺構を覆う厚さ10cm前後のバラス層から建長２年（1250）の銘を持つ超昇寺所用の軒平瓦１点が出土している。

西地区（６ＡＢＯ－Ｐ）　当地区もこれまでの調査結果に新しく加えることは少ない。ＳＡ0109は当区南端を画する築地であるが，寄柱は検出していない。ＳＡ0121はＳＡ0109の２間手前で止まる南北の掘立柱塀である。ＳＡ0120はＳＡ0121を東へ約５尺移した南北の掘立柱塀で，南端はＳＡ0109に取りつく。建物３棟ＳＢ0112・0131・0145はこれまでの調査でその一部を検出済のものである。

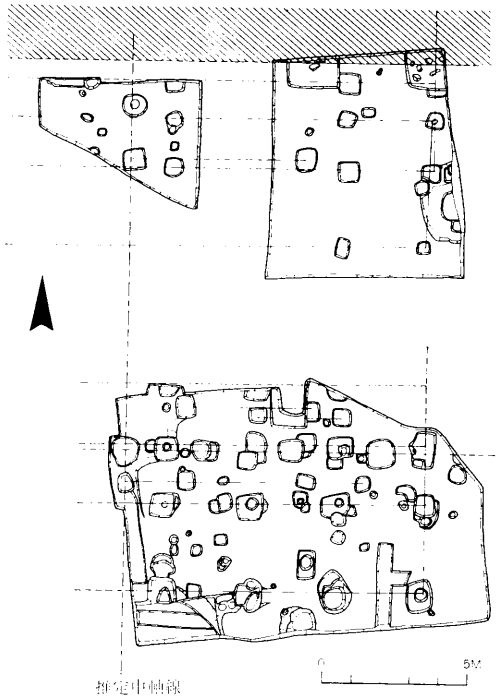
法華寺旧境内の調査　法華寺は平城宮東院の東側に寺地を占め，原藤不比等の邸宅が光明皇后の皇后宮から宮寺となり，更に大和国分尼寺となった由緒ある寺院である。現在の法華寺本堂・鐘楼・南門は慶長年間の再建で，重要文化財に指定されているが，寺地は往時にくらべてずっと狭くなり，伽藍中心部は現寺地の南方に当る。法華寺旧境内では最近家屋の新築や建替えが急速に増加し，従って事前調査の件数もふえ，48年度においては５件の緊急発掘調査を行った。いづれも家屋建設にともなうもので発掘面積も限られたが，法華寺町661番地（82―６次調査），同1115番地（82―11次調査）では多くの遺構を発見した。



第６図　法華寺旧境内調査位置

第82―６次調査　法華寺南門前の農協倉庫南側で，旧金堂の位置と推定されるところである。現南門前の一郭は法華寺蔵古図に「金堂の芝御林」と記され，別の古図ではこの一郭に「東西四十二間，南北六十三間半」と書入れ，中央北寄りに「金堂残礎」，南方両側には「塔跡礎」と記し，大和名所図会にも南門前方に礎石を画いている。

まず，家屋建設予定地の下を調査したところ，法華寺金堂或はその前身遺構と考えられる柱穴を検出したので，調査地域を南と西に拡げ，３個所，計160㎡の調査を行った。地表下20～30cmで黄褐色粘質土の地山層の遺構面に達したが，一部に褐色粗砂質の整地土があり，南方では埴輪片，須恵器片を含む古墳時代の薄い整地土があって，柱穴はこれ等整地土から掘られていた。発掘範囲が狭く，３個所に分かれていたため，完全な建物にはまとまらなかったが，５間以上の遺構が重なっていた。最も重要なものは，北端に東西に並ぶ１辺1.8m程の大きい柱穴で，東は中央部に凝灰岩切石と野面石を詰石状に置き，西方も野面石が根石状に残っていた。東方の柱穴を掘り下げたところ，地山面から約90cmで底に達したが，底に野面石を置き，凝灰



第7図　82—6次調査遺構図

岩柱根巻石と野面石を粘土で固くつめ込んでいた。この東西柱穴列は心々ほぼ14尺位と考えられ，また他の掘立柱穴の配列等から見て，中軸線は北側西調査地区の中央やや東寄りにあるようで，現本堂地下で調査された遺構の中心とよく一致する。この中軸線は二坊大路から一町西の小路真より，95尺西へ寄ることになるようである。中軸推定線から考えて，この建物は桁行5間以上，柱間寸法は5間については14尺等間と見てよいようである。この大きい柱穴は，これより前方には発見されていないので，前面柱筋に当ると考えられ，この建物の大部分は今回の調査地の北方に当ることになる。

この柱穴は掘立柱のものと考えられるが，柱根等は残存せず，一旦柱を抜取り，根巻石等を根固め用に詰め，改めて礎石を据えたものと思われる。またこの柱穴に対する基壇の痕跡等は発見されなかった。これが法華寺金堂乃至その前身建物に当るかどうかは明らかでないが，位置や柱間寸法から見てその可能性はかなり大きいであろう。

北とその西の調査地区では，この柱穴と切合う10尺間2列の柱列があり，桁行少くとも7間の建物の前庇の可能性が大きい。その他に桁行10尺間・梁間15尺の建物，東西に20尺離れた柱穴，8尺間の小柱穴列，中軸線にのる柱穴1個等が重複していた。

南の調査地区では身舎桁行7間乃至それ以上で，7尺2間の身舎に梁間10尺の前庇が付く総柱建物が最もよくまとまり，この前面柱筋は北の10尺間建物の前面柱筋から50尺南にあり，相関連する遺構と思われる。この建物の身舎中央柱筋に東西10尺間に並ぶ柵列らしい柱穴列があり，その他にも数個から2個組合う柱穴があるが，小範囲のためまとまらない。このうちに，始めに記した14尺間の大きい柱穴から40尺南に通りの揃う14尺間の2個の柱穴があり，関連す

第8図　柱根巻石検出状況

るものと考えられる。

柱穴から発見された凝灰岩の根巻石は，断片を含め16個あり，４個で掘立柱の足元を巻いて礎石様に見せるもので，１個が約45cm角，厚みは約30cm，４分の１円に大きく削り取り，上面に円柱座状の造出しのあるものと，上端も４角に整形したものがある。径約60cmに近い太い掘立柱のもので，類例の少ないものである。遺物としては，このほか重弧文軒平瓦片１個・土師器・須恵器・埴輪等があったが，何れも小片が多かった。

以上のように第82―６次調査では法華寺乃至その前身の重要な遺構の一部を確認し，また，この地が不比等の邸宅から法華寺となる複雑な経過を示すかのように重複した遺構が発見された。法華寺では本堂の解体修理の際に本堂地下及びその前面に，７間４間の建物の遺構が発見され，鐘楼の解体修理の際にはその旧基壇と礎石詰石等が発見されている。更に1973年には本堂東側で３期以上の重複遺構が発見され[註1]，その最後の時期の建物は本堂地下遺構と同様に，正背面柱中央４本を掘立柱，その他を礎石[註2]とする特殊な構造で，建物中心が二坊大路から一町西の小路心と一致し，本堂地下遺構と25尺離れて東西に並ぶことが確認されている。しかし伽藍中心部は殆んど未調査で，この重要な遺構について，緊急に対策をたてる必要があろう。

第82―11次調査　法華寺旧境内の北端に近い地域で，県道奈良生駒線のすぐ南側に当る。調査面積は45㎡であるが，この小範囲から掘立柱建物２棟，柵列らしい掘立柱３列が発見され，このあたりにも多数の遺構の存在することが確認された。調査地区の東寄りに10尺間２列の柵状柱列が６尺離れて南北方向に通り，西半には身舎梁間16尺，東庇11尺，桁行８尺等間で４間以上の南北棟が最も古く，次に桁行９尺等間，身舎梁間20尺，南庇梁間10尺の東西線の東端２間，最後に10尺間に並ぶ東西柵状柱列があった。

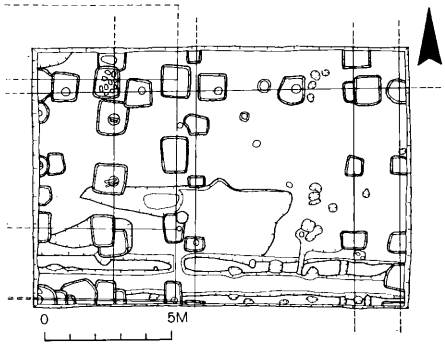
また，第82―９次調査では柱穴大小５を検出しているが，調査面積が限られているため，建物としてまとめることはできなかった。しかし，これら柱穴に先行して木炭のつまった土壙がありさらにフイゴの口や鉱滓を含む灰原があった。近くに鋳造工房のあったことが推察される。

三笠中学校・左京三条二坊の調査（第83次）

調査地は奈良市北新町61-1番地。市立三笠中学校旧敷地内にあり，平城京左京三条二坊十坪，十五坪の推定地にあたる。発掘により検出された遺構，遺物は大きく３つの時期にわかれる。

1，古墳時代の川のあと，2，奈良・平安時代初期の遺構（平城京にかかわるもの），3，平安時代以降の遺構である。以下各時期ごとに概要をのべる。

古墳時代遺構　ＳＤ0880，ＳＤ0881の２条の川の跡がこれにあたる。発掘区東南部のＳＤ0881（幅４ｍ前後，深さ）からは，土師器の小形丸底壺



第９図　82―11次調査遺構図

多数，建築部材，農耕具，日常用具を含む多量の木製品，木材が出土した。十五坪にあたる部分は，この時期には湿地であったと推定される。

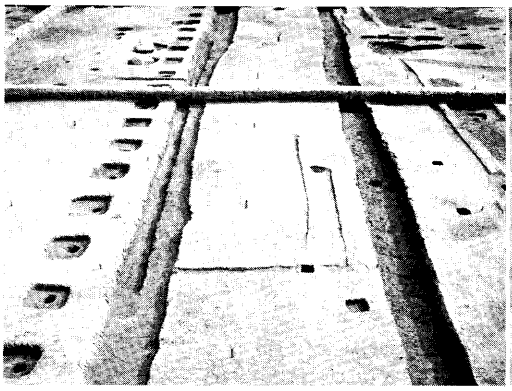
奈良時代・平安初期遺構　平城京にかかわる遺構であり，今回の発掘で検出した遺構のほとんどが，この時期に属する。

十，十五坪々境の小路　小路ＳＸ0873は幅4.5ｍ前後の路面をもち，ＳＤ0874，ＳＤ0872の両側溝を伴なう。側溝は各幅1.1ｍであるが，水流に関係する砂礫等の堆積はみられない。ＳＤ0872の東に接して，十五坪の西を限る柵ＳＡ0871がある。ＳＤ0874の西側には柵がないが，黄褐色粘土の盛土の残存が見られ，築地の痕跡と考えられる。ＳＡ0871と推定築地中心線との間隔は9.3ｍ前後。朱雀大路心より小路心までの距離は，3150尺（１尺を0.295ｍとする）で，京の計画想定線と一致する。

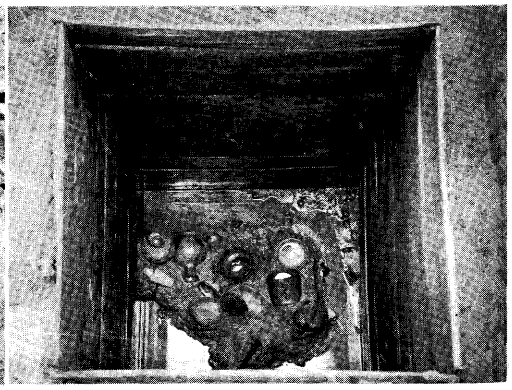
十五坪　坪の中央部西寄りの個所にあたり，東西約37ｍ，南北45ｍの範囲を調査し，建物７棟，柵４条，土壙などが検出された。これらの遺構は柱穴の切合いや相互の配置関係などから３時期にわけることができる。

Ａ―１　坪の西を限る柵ＳＡ0871より東17ｍ程に位置する南北柵ＳＡ0870までの間には目立った遺構はなく，空閑地となる。この空閑地をおいて東側に建物が３棟配置される。坪の南北２分の１線から北へ12ｍの位置に東西棟建物ＳＢ0864Ａがある。梁行４間，桁行５間以上あり，柱間寸法は梁行桁行ともに10尺である。ＳＢ0864の南側，発掘区の東南隅にこれと柱筋をそろえてＳＢ0861の建物がある。東西棟であり，桁行５間を検出しているが規模は不明である。ＳＢ0867はＳＢ0864の北側20尺にあり梁行２間桁行５間以上で柱間は梁行桁行ともに９尺である。

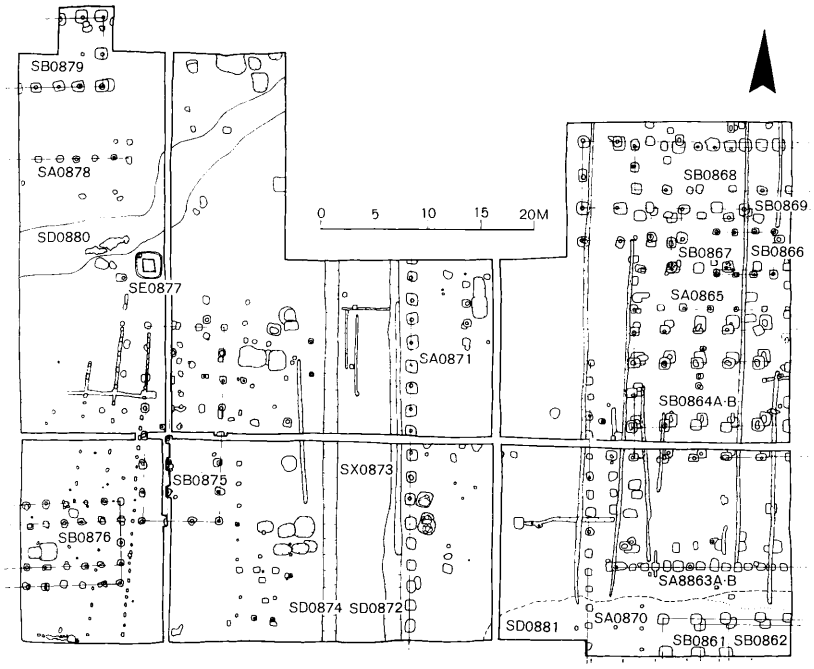
Ａ―２　この時期にはＡ―１の３棟のうち２棟が建替えられる。ＳＢ0864ＡがＳＢ0864Ｂになり，ＳＢ0861は桁行東西の規模を１間減じてＳＢ0862となり，さらにＳＢ0867とＳＢ0864Ｂとの間，坪の南北２分の１線位置に東西柵ＳＡ0863がつくられ，ＳＢ0864Ｂの北側に東西柵ＳＡ0865がつくられる。



第10図　南北小路および側構（十・十五坪境）



第11図　井戸ＳＥ0877内部



第12図　83 次 調 査 遺 構 配 置 図

B　坪の北部にＳＢ0869がつくられる。梁行２間，桁行６間以上の東西棟で，西妻から３間分には南面する庇がつく。柱間は梁行桁行ともに10尺である。

C　この時期には建物はＳＢ0866の１棟のみとなる。ＳＢ0866は桁行３間（柱間６尺）の小型建物である。十五坪の建物の配置をみると，坪全域に統一的な計画線が想定され，建物群の建替え，改造も全体的に関連を持っておこなわれており，１町が一つの単位で使われていたことを示している。

十坪　東北部の東西約28ｍ，南北約55ｍの範囲を調査した。ＳＢ0897は４間以上×２間　柱間桁行７尺梁行10尺の東西棟，ＳＡ0878はＳＢ0879の南の東西柵である。ＳＥ0877は深さ約３ｍ，一辺2.3ｍ前後の掘形内に長さ120㎝，幅23㎝の板を12段以上井籠組としている。井戸内の遺物から，神亀以前より奈良末まで継続して使用されたことがわかる。以上３つの遺構が奈良時代に属する。ＳＢ0875（７間×３間，柱間桁行９尺・梁行８尺，西庇南北棟），ＳＢ0876（５間以上×４間，柱間桁行６尺，梁行・母屋７尺庇６尺，東西棟）の２棟の建物は平安時代の遺構である。

平安時代以降の遺構　十坪内で発掘区西南端から，東北方向に斜めにのびる性格不明の３条の柵状の遺構ＳＸ0883がある。

朱雀大路の調査（6AIA・6AHD）　調査区は奈良市柏木町カケコシ182・183・185～189，同市六条町六条183～185番地にわたる。朱雀大路と，五条と六条の条間路の交叉点の北側にあたり，羅城門と朱雀門のほぼ中間にあたる部分である。今回の調査では，朱雀大路路面と東西

両側溝を検出し，その位置，規模を確認するという当初の目的を達成することができた。[註3]

朱雀大路　確認された路面敷の幅は67.3m。石敷，瓦敷等の痕跡はない。多少の削平を受けているが，奈良時代の状況をとどめているとみられるので，路面は自然堆積の黄色又は青灰色を呈する砂質土のままであった可能性が強い。路面は中央部で高く，両端に向って低くなるかまぼこ形になっており，現状で路肩は中央部より50cm前後低い。現地表より0.9mから1.5mの深さで路面を検出した。

朱雀大路東側溝　南北約10mにわたって検出。岸，底には出入りがあるが，溝幅は4.5m，深さは1.1m前後と推定される素掘りの溝で，護岸施設はみられない。溝底はほとんど平坦で，わずかに北から南に向って低くなる。堆積土層の様相から，水がよく流れていたことがわかる。

朱雀大路西側溝　南北約22mにわたって検出。深さは1m程で，東側溝と似た規模だったと推定されるが，最低3回の変形修復が行なわれており，本来の溝幅は明確にできない。検出最大幅は7.5mをはかる。検出された溝の南端，条間路と接すると推定される位置で，西岸の下に径30cm程度の玉石が数個発見された。朱雀大路と条間路の交叉点における施設に関係するものかも知れない。今回の発掘調査区内では，溝に沿って存在すると考えられる築地をその想定位置に発見することができなかった。しかし東西両側溝の堆積土中には，多量の瓦が落ちこんでおり，これは築地の存在を裏づける一資料となろう。

左京六条一坊　大路東側溝の東側に設けた発掘区が，左京六条一坊二坪の推定地にあたる。側溝の東側4mの間は，ほとんど平坦で，この部分に想定される築地の遺構は発見できなかった。更に東の発掘区内には，鉄滓，焼土を含む小土壙が検出され，ここに鍛冶工房があったことがわかる。柱穴が検出されず，工房の規模などは明らかでないが，土壙が築地想定位置上にも存在することから，これは奈良末以降のものと推定される。

右京六条一坊　大路西側溝西側の発掘区は，右京六条一坊二坪にあたる。奈良時代の遺構としては発掘区の北西隅に掘立柱穴が1つあるだけで，ここでも築地は検出できなかった。築地は幅5.5mほどの現水路と畦畔の下になっている可能性が強いと考えられる。奈良時代の遺構面の下には，水の流れた溝状の遺構があり，古墳時代の土師器，須恵器，木質遺物が包含されていた。

下ッ道側溝朱雀大路路面の下層で検出。東側溝は幅約4.5m，深さ約40cm，西側溝は幅約4m，深さ20cmから70cmをはかる。両溝は心々距離が約23mで，この間の中心線は朱雀大路中心線と一致する。溝に挾まれた下ッ道の幅は，朱雀門の北側で確認されたものと，ほぼ一致する。溝からは5C前半から7C末頃までの土師器の破片が出土した。

今回の発掘調査で知られた朱雀大路の規模は，両側溝心々距離で73.4m～74.0mとなる。溝の幅，平城京右京九条一坊で検出されている築地の大きさなどを考えると，朱雀大路築地心々距離は90m程度，30丈とみるのが妥当であろう。朱雀大路の方位についていえば，今回の発掘

によって判明した大路中心線と朱雀大路中心とを結ぶ線で，国土調査法による第6座標系の方眼北に対して，西へ0°15′50″～0°16′24″の振れ，今回の調査で検出した大路西側溝心と羅城門の調査で判明した大路西側溝心とを結ぶ線で，西へ0°14′42″～0°15′49″の振れを示している。この2例の平均値は0°15′41″であり，これが今回の調査の結果得られた朱雀大路の方位といえよう。

左京一坊五条四坪の調査　調査は奈良市柏木町の奈良県警柏木基地グランド予定地で行った。当該地は左京一坊五条四坪にあたり，朱雀大路と五条大路に面した一部である。調査は朱雀大路東面築地塀の痕跡と推定される畦畔に沿って，東西トレンチを4本設定し，一部を南北に拡幅した。

発掘は旧水田地の肥土・床土を除去したのち，地表下約40cmのところで遺構面を検出した。遺構面上の遺物包含層から出土した瓦器片等の遺物により，12世紀末頃には水田化したものと考えられる。

検出した主な遺構は建物5棟，柵列1条などである。建物遺構はいずれも桁行3間程，柱間寸法も6尺～8尺で，規模が小さい。

トレンチ西端の畦畔下に推定された築地の痕跡は見当らなかった。これは，地形測量の結果，畦畔が朱雀大路の東面築地推定位置よりも，この附近で若干東にずれているためであり，したがって，築地遺構は畦畔よりも西に想定できる。

旧地形は各トレンチの西端部から西方に斜降しており，また，朱雀大路路面に当る水田地帯が低湿地であるところから，条坊の家敷地内よりも朱雀大路路面が低かったと推定される。

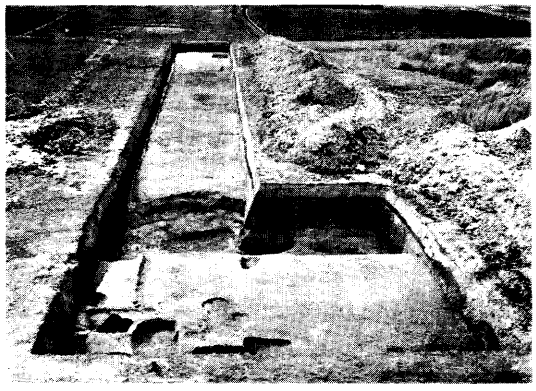
以上のように発掘調査の結果，朱雀大路に面する築地塀は発掘区内には検出できなかったけれども，左京一坊五条内の状況が一部明らかとなった。すなわち，検出した遺構は旧宅地の西端部分にあたり，附属の建物―納屋，雑舎等がかなり密に存在していたことが確認された。

（岡田英男　藤村　泉　岩本圭輔）

註1.　浅野清「大和法華寺に於ける新発見について」大和文化研究1巻1号　1953

註2.　奈良国立文化財研究所年報1973「平城宮跡とその周辺の発掘調査」

註3.　奈良国立文化財研究所編「平城京朱雀大路発掘調査報告」奈良市　1974参照



第13図　朱雀大路東側構